

所在地 宝塚市宝塚

写真・文 稲上 文子

写真 奥村 由和 芝崎 康子



応接間妻壁の
オーナメント
「ASIA」とあ
るが意味不詳

門から正面外観（写真：奥村由和）

■阪急沿線の宅地開発

邸は武庫川水系のひとつ、支多々川に東面する250坪の敷地に建っている。阪急逆瀬川、宝塚南口両駅からほぼ同じ距離に位置し、緩やかな丘陵地の中腹で、甲山を背負う立地である。

この辺りが本格的に宅地化された経緯は定かでないが、阪神急行鉄道（現阪急電鉄）による大正10年の西宮北口-宝塚間（西宝線）の開通が大きなきっかけであったと思われる。阪急沿線の郊外型高級住宅地の開発は、明治38年住吉村銅音林に始まるといわれ、大正5年ごろには雲雀丘・花屋敷、昭和3年に芦屋六麓荘の住宅地開発が緒に着く。西宝線（現今津線）沿線では宝塚大劇場（大正13）や宝塚ホテル（大正14）が竣工するなど賑わう中、仁川（大正13）、仁川高台（昭和10）と宅地開発が続く。

この邸は、上記の流れで郊外型住宅として建てられたと思われるが、現在の家人の先代が戦後入手した住宅であるため、建てられた時期、経緯とも定かでない、ただ戦後米軍の接収を受けていたことを後に知ることとなる。当時この家に住んでいたという米人夫妻が訪ねてきたというのである。よって戦前の建物であるのは確かなのである。宝塚では宝塚大劇場（昭和21年まで接収）などと合わせて山手の高級住宅のほとんどがこうして接収され、それは昭和28年米軍撤収まで続いたという。

■控えめな外観

邸の姿は川沿いの道すがら、少し背の高い応接間の妻壁により望むことができる。大きな敷地に一部中二階が載る以外は低く、とても控えめなボリュームで建つ。庭木が現在のように整理されるまでは、長らく木々に遮られ、全貌が見えることもなかったそうである。

赤い鴉栗瓦が載る緩勾配の切妻屋根で、一部の庇にスパニッシュ瓦が使われている。平面構成上、建物の南半分が和室となっているため大きな開口部がある部分以外は大壁で、スタッコ仕上げの外装をまとっている。

外観の特徴は、正面妻壁に象徴的なオーナメントが「ASIA」という文字と共に付けられていることのほか、円形アーチや丸窓、挽き物の木格子が賑やかに窓を飾る



平面図

など、小さな建て家のそこそこに飾り窓が穿たれていることである。

■愛着を呼ぶ室内装飾

内装も実に細やかにデザインされ、深みのある濃色に着色された木彫飾りを中心に建具の意匠も漆喰塗りの白壁に映えている。ひとつひとつの「飾り」はいろいろな西洋様式の借用ではあるが、空間用途に似つかわしく濃薄混ぜた構成がなされている。これは公共建築や商業建築とは違って、日々暮らす「住宅」であるがために、時間と共に馴染んでいけるようにと設計されたのであろう。あえて威厳を感じさせる部分があるとすれば、応接間の漆喰壁飾り（メダリオン）ぐらいで、多用されている輸入ガラスの細工物（カットガラスやステンドグラス）も小気味が効いていて、威厳というよりは、住むほどに感じる味わいを求めたものではなからうか。

平面プランで特徴的なことは、控えめな入り方の玄関から応接間に向かう動線にかぶさるようにダイニングキッチンと思しきオープンスペースがあり、それが階上のロフト風の小部屋や応接間にオープンにつながっていることである。この家にはあえて中心と呼べるスペースはないが、そう広くない空間に非常に有機的で多用な表情を持っていて、家を移動する毎に新しい風景が発見できる。



和室の硝子障子



玄関



応接間



応接間の星入りの丸窓



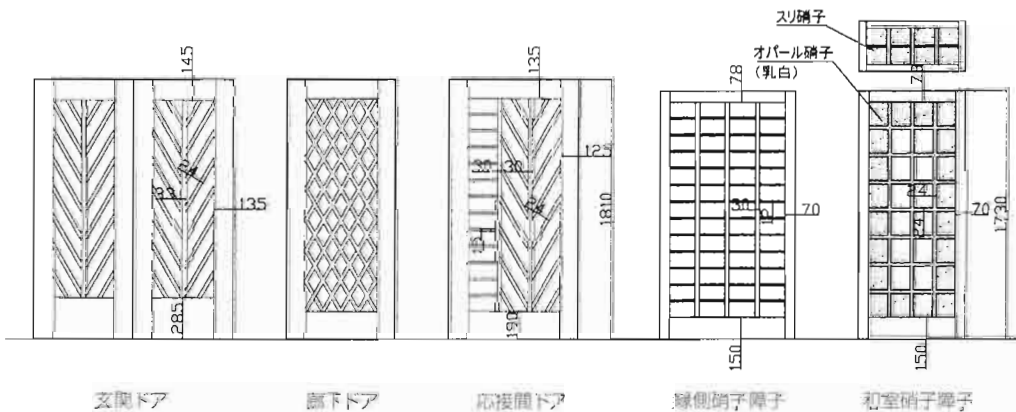
和室のスタンドグラス



応接間の飾り棚



書斎の窓



玄関ドア

廊下ドア

応接間ドア

縁側硝子障子

和室硝子障子



玄関の木格子 (写真: 芝崎康子)



書斎の色硝子障子

■「和」と「洋」

設計密度は非常に濃く、モジュールは、洋室部分が3尺であるのに対し、和室部分では京間量に忠実である。建具の寸法も「洋」で6尺高さに対し、「和」では5尺7寸とはっきり区分けされている。また建具意匠においては、矢筈や菱格子、鱗紋(三角形)を「洋」で繰り返し用いている一方、「和」空間では、きちっとした和様の言語を使いながらも一枚も紙張り障子を採用せず、ガラスの使い分けだけで「和」とその機能表現している。すりガラスとオパールガラスの使い分けがその別である。また「洋」で用いた言葉をもう一度、書院の建具で琥珀色のガラスを伴って引用していたり、和室にしかも外光を受けない部位にスタンドグラスを設け、和に洋なる「奇」をてらった趣向も試みられている。

■建物の用途と様式について

邸宅建築としては少し不自然な間取りを考えると、この建物は本宅ではなく別荘としてこの地に建てられたのでは、との類推が起こる。玄関脇の四畳半の部屋はキッチンと直結しており、女中が書生部屋と見立てられる。気楽に訪れる客とは応接間で接見、常には和室か書斎で過ごし、夜は和風ながらベッド生活を考慮した板間付きの離れで床に就く。また、季節によりロフト部屋で趣味等を楽しむこともあろうし、そこは、ゲストルームとしても機能したのではなかろうか。いずれも少人数のための器と考えた方が腑に落ちる。

大正から昭和の初めにかけて、日本にアメリカの建築スタイルが入ってくる。近くでは関西学院大学(昭和4)

や神戸女学院(昭和8)といったミッション系の大学が米人ヴォーリス(1880-1964)により設計され、こうした郊外型の邸宅建築にも、アメリカの田園住宅的な好みも反映されたものがある。華美でなく、どちらかというのどかなその意匠・趣味が当時の富裕層に好まれたようである。この邸もそうした時代背景が知れる逸例で、歴史的な環境遺産として学ぶべきものが満載されている。

■「硝子の家」

ここで家人から賜った挿話を綴りたい。この「硝子の家」とも呼べるガラスを多用した家に住まう御当主は、期せずしてガラス製造技術の専門家でおられる。ガラス製造過程においては、必ず古ガラスを原料に加えるのである。古い材料と混じり馴染むことで、新しいガラスの出来映えに必ず寄与するといふのである。含蓄と感謝を持ってこの言葉を受けとめ、この取材が愛すべき建物の行く末に役立つことを期する。

■建物データ

木造平屋建て(一部中二階) 切り妻屋根 1階134㎡、中2階18㎡、合計152㎡(第46坪)

■参考文献

宝塚市制三十年史(1985、宝塚市)、宝塚革新風土記(妻木光次編、2002、宝塚医療生活協同組合)、飯倉歴史散歩(野添梨麻著、1987、鷹書房)、たからづか物語(1994、宝塚市復興部観光課)、日本の近代建築(藤森照信、1993、岩波新書)